

航空機軸受材

大和合金、欧州向け納入

今夏開始、増収策の柱に



萩野社長

特殊銅合金メーカーの大和合金(本社「東京板橋区、萩野源次郎社長)は、航空機向け軸受用素材の拡販を加速する。実績がある国内や中国に加え、今

夏には欧州メーカー向けの納入が開始する予定。2012-14年度の中期経営計画では売上高を1年度比3割増の43億円まで伸ばす計画だが、このうち航空

機向けの比率を1割程度まで引き上げたい考え。同社はアルミ青銅やクロム銅、ベリリウム銅など特殊な銅合金の専業メーカー。航空機

の足回りに使われる軸受(フッシュ)向けのアルミ青銅素材は、国内や中国のメーカーで採用されている。

近年は、欧州の航空機関連の展示会に参加するなど、積極的に広報活動を行っており、欧州メーカーには一昨年からサンプルを納入してきた。

ユーザーの要求に合わせ、高力黄銅などの軸受素材も開発を進めてきた結果、2月に欧

州メーカーから初の受注を獲得。今夏には納入を開始することが決まった。6月には、フランスで開かれるパリ・エアショーに日本貿易振興機構(JETRO)の支援を受けて出展する。

航空機産業は素材の認定基準が厳しい分、価格競争に巻き込まれにくい。同社は昨年、航空宇宙産業の品質マネジメントシステム「JISQ9100」

認証を取得。高い技術力と信用力を生かし、同分野での拡販を一段と加速する考え。

昨年度から始まった3カ年中計では、14年度(15年3月期)までに売上高を年率1割程度で引き上げ、経常利益率は5-10%水準を維持したい考え。航空機向け拡販は増収策の柱の一つと位置付け、売上高比率は現在の数%から1割程度に引き上げる。

収益底上げ策としては、朝霞工場の押出事業で受託加工を増やすことにも注力する。同事業は、棒・管の内製化や研究開発への活用を目的として、5年前に朝霞伸管工業から譲受した。現状は生産量に対して生産能力が余っており、受託加工を増やすことで稼働率を引き上げたい考え。押出機がフル稼働になれば、会社の取扱量が5割程度増えることも期待できる。